

平田実

1930年、東京に生まれた平田実は、1955年よりフリーランスの写真ジャーナリストとして活動。そのテーマは、沖縄や空のスポーツ、また最近では携帯写真まで幅広い。中でも、60年代にてがけた Art in Action のシリーズは、反芸術パフォーマンスを考えるのに不可欠な映像となっている。今夏は、アルル写真祭で「ディスカバリー・アワード」にノミネートされ、沖縄と Art in Action の二本立てで参加した。

今回の出品作のうち、ハイレッド・センターの《ドロッピング・イベント》は、1964年10月10日に東京・池坊会館の屋上から、旅行鞆や背広、ブラジャーなどを「落とした」イベント作品。また《洗濯バサミは攪拌行動を主張する》は、中西夏之本人による路上での行為とモデルを用いたパフォーマンスである。集団蜘蛛のパフォーマンスは、70年2月に行われた『九州ルネッサンス・英雄たちの大祭典』にグループ名が無断で使われたことへの批判として、交通量の多い都市の交差点で性交を試みる路上ハプニングを行った。

平田がこうした Art in Action を知るようになったのは、反芸術のアクション野郎、篠原有司男を通じてだった。篠原を最初に知ったのは58年の読売アンデパンダン展。その後、59年あるいは60年にアメリカのナナ通信社の仕事でボクシング・ペインティングを撮影取材。以後、篠原を通じて、ネオダダやハイレッド・センターなどを知る。美術館や画廊などの既成の場所から文字通り「とび出したアート」に取り組み彼らのエネルギーと知性に感動した平田は、彼らの「共謀者」として、彼らの行為の作品を目撃し撮影した。

平田が撮影した Art in Action の写真には、いくつかの特徴がある。

まず、取材対象が広範で密度も濃いこと。クールな東京フルクサスから土着的儀式派まで、数多くの作家やグループを目撃したことは、写真集『超芸術』（三五館、2005年刊）からもあきらかだ。特に、ハイレッド・センターとゼロ次元との密着度が高い。後者は写真集『ゼロ次元』（河出書房新社、2006年）にその成果が出ているが、前者は2年という短い活動期間のうち《第五次ミキサー計画》、および64年の主要4イベントのうち《シェルター・プラン》を除く3作（クロージング、ドロッピング、クリーニング）を撮影している。

そこには一貫した先鋭な写真眼があり、瞬間をとらえる構図力の確かさが感じられる。パフォーマンスでは、はじめに行為ありき。しかし、写真によっては「単なる記録」や「歴史的保存」以上のものになりえる。今回は出品されていないが、7人のパフォーマンスが、まるで活人画のようにうまく画面におさまっている《クリーニング・イベント》の一枚などは60年代美術に刻印された記念碑的イメージに違いない。また《ドロッピング・イベント》で、落下する物品を屋上から、また地上から捕獲する眼にはシュールな感性が根ざしている。

平田の共謀者としての真骨頂は、パトカーのサイレンを聞いて一目散に逃げる集団蜘蛛・リーダーの森山安英と女性メンバーに伴走する平田のカメラだ。なんとも名場面だが、実は平田も「逃げている」。なぜなら写真家が捕まってフィルムを押収されてしまえば、それは証拠写真であり、パフォーマンスも逃げ隠れはできない。二人の身の安全を確保するために自分も一生懸命に逃げて、なお撮影する執拗さは、のちに自らもハンググライダーで飛びながら、バードマンたちを撮影する空のシリーズへと受け継がれていく。

もう一つ重要なのは、行為を作品として位置づけていく方法論や考え方が確定していたわけではないパフォーマンス・アートの黎明期・60年代に、平田は写真ジャーナリズムをいかして、Art in Action を雑誌媒体にプロモーションしたことだ。これは記事の売込みから写真と下書き原稿の提供までをまとめて手がける戦略性で、『週刊大衆』をはじめ30本ほどの記事を実現させる実績を作った。いわば、芸術と生活の境界を侵犯した反芸術のパフォーマンスを、さらに深く公共圏へと押し込んだことになる。

美術史における Art in Action の記念碑化 (memorialization)、そして活字メディアでのプロモーション。この二つの役割を通じて、平田は Art in Action の第二の人生 (アフターライフ) を作り、共生的な歴史主体として機能したといえるのではないかと私は考えている。

(富井玲子 2011年8月23日)

作品

《中西夏之の「洗濯バサミは攪拌行動を主張する」(モデルによる)》1963年

《中西夏之の「洗濯バサミは攪拌行動を主張する」(ハイレッド・センター『第6次ミキサー計画展』に際して)》1963年5月28日

《ハイレッド・センターの「ドロッピング・イベント」》1964年

《集団蜘蛛の福岡・天神交差点路上ハプニング》1970年